漆と磁器のコンビネーション（その１）
幕末・明治の輸出工芸品～磁胎漆器浦島太郎図大皿～

幕末明治の輸出工芸品に、磁胎漆器や陶胎漆器と呼ばれるものがあります。文字通り、磁器や陶器の表面に漆塗りを施した工芸品です。有田焼や瀬戸焼、豊楽焼、京焼など日本各地のやきものに見られます。

江戸後期から明治の中ごろにかけて、長崎では漆器の生産が盛んで、磁胎漆器も数多く作られたようです。『著名物産長崎漆器沿革史』（林虎松、1903 年）によると、安政年間（1854-60）頃には、長崎の漆工は 400 人以上おり、そのうち塗工 300 余人、貝師 100 余人という構成でした。明治期には、出島の商館跡に店を構えた香蘭社が「漆塗絵花瓶」を製作して輸出し、また西浜町の田代屋春助が「漆塗絵の有田製陶器花瓶」を輸出するなどして、一時期輸出が盛況を呈したようです。

写真の大皿は、江戸時代の後期に作られた有田焼に漆塗りを施した作例の一つです。一見すると漆器のように見えますが（図版１）、裏を見ると染付が施された磁器であることがわかります（図版２・３）。

黒漆地に、蒔絵の技法や漆絵の表現手法を用いて、右手で玉手箱をしっかりと抱き亀の背に乗って竜宮城を後にする浦島太郎が描かれています（図版４・５・６）。顔や手、波頭は立体的に表現されており、きものや亀の尾の表現も繊細で、高度な漆工技術の存在が感じられます。日本人なら、この意匠を見ただけで、物語の展開を全て理解してしまいますが、海外でもこのような物語性のある文様が工芸品の意匠として好まれました。

表面だけ見ると、普通の漆器に見えますが、実は磁器の器であったという意外性が、浦島太郎の意外な結末と合い通じるものがあったのかもしれません。

長崎県文化振興課　松下久子

（図版１）磁胎漆器浦島太郎図大皿　有田窯　1820-60 年代　長崎歴史文化博物館蔵

（図版２）同　裏面

（図版３）同　裏面拡大

（図版４）同　浦島太郎部分

（図版５）同　亀と波涛部分

（図版６）同　竜宮城部分